

閑話三題 — 洪沢栄一関連 —

東京都羽村市 山口正義

二題は令和三年に高麗郷民俗資料館で開催された「洪沢栄一と日高展」を参考にしたもので、栄一の若き日の行動を示すもの。もう一題は筆者が所属する古文書研究会で読んだもので、栄一も随行したバリ万博への「出展募集」の古文書の紹介です。

一、清流峠の漢詩

洪沢栄一は十九歳の時、叔父（洪沢文平か）に同行して江戸に行く。その様子を「南遊季候」という紀行文に遺している。血洗島（現・深谷市）の自宅を安政五年（一八五八）三月十六日に出発、南下して二泊で江戸に入っている（因みに、この年の十二月七日に千代と結婚している）。

十七日には越生・毛呂を通り、飯能に抜ける途中で通過したのが「清流峠」。調べてもこの名前は幻だが、当時の清流村は今の日高市清流だ。宿谷から平沢天神に向かう途中を右折して高麗川カントリーの西側の山道を行く。右側の富士山を少し捲くように進路を進めると、やがて滝沢の滝へ行く分岐点に着く。そこから急峻な坂の途中の左に鶴ヶ島カントリーがある。坂の頂上近くから西に行く尾根は物見山方面。この辺りは雑木で眼下の景色は見えない。が、当時は平沢、更にその先が見えたのだろう（巾着田方面は見えなかった？）。南遊季候は次のように記し、漢詩二編を綴っている。

過毛呂一里半、有嶺、曰清流峠、嶺上四望、嶺山如眠、近山似笑、若芽之緑、柳色之黄、猶如紅桜白杏紫草、一山之

中、恰為五彩之觀、而抽蕨之童、歛々喜前、伐木之樵、靜々眠後、其幽雅靜間、十倍於先日之所目、有詩、（漢詩二編が続く）

この文章も続く漢詩も難しい。高麗郷民俗資料館のホームページから引用させて頂きたい。

毛呂を過ぎて一里半、嶺あり。清流峠という。嶺上四望し、嶺山眠るがごとく、近山笑うに似たり。若芽の緑、柳色の黄、なお紅桜・白杏・紫草、一山の中、あたかも五彩の觀たるがごとし。抽蕨の童、歛々と前に喜び、伐木の樵、靜々と後ろに眠る。その幽雅な靜間、先日を目する所と十倍す。詩あり。

輕装三月探芳天（輕装の三月、芳天に探る）

正好杏桜妍且鮮（正に好き杏・桜、妍かつ鮮）

嶺上艷濃花耶靄（嶺上に艷濃の花は、靄か）

溪間細淡水疑烟（溪間に細淡の水は烟を疑う）

攀霞崖路背負劍（霞崖を攀る路、背に劍を負い）

蹈錦橋辺手携篇（錦橋を蹈む辺り、手に篇を携えん）

一笑間人無遠慮（一笑せよ、間人遠慮無く）

吟声誤覺樵夫眠（吟声し、誤りて覺す、樵夫の眠り）

○妍||美しい ○鮮||鮮やか ○烟||霞やもや ○攀る||よじ登る ○篇||書物や詩、文章 ○間人||暇な人 ○樵夫||きこり

（二つ目の漢詩は省略）

二、比留間道場で劍術試合

「洪沢栄一と日高展」では、「桜陰筆記」からも栄一の行動を紹介している。「桜陰筆記」は高麗神社の宮司で高麗家56代

当主高麗大記の幕末から明治初頭の日記。

元治元年（一八六四）六月十四日（栄一 24歳）、一橋家に仕官した栄一は洪沢成一郎と共に領内の高麗地方に農兵の選出のため来ている。梅原にあつた甲源一刀流の「比留間道場」では、栄一は比留間邦造、高麗大記と剣術の手合せ（試合）を行っている。また、高麗大記は毛呂の権田（直助か）から京都への伝書を栄一に渡し、周蔵（比留間周三か）門下の小川相太が比留間家の推挙で農兵に選ばれている。小川相太は後に彰義隊士の墓守となった人として知られるが、小川町の和算家・杉田久右衛門の孫でもあつた。栄一はこの時の関東廻村で三、四十名、江戸で撃剣家八、九人、漢学者二人を得て京都に戻っている。「桜陰筆記」から関連箇所を幾つか抜き出してみよう。

（元治元年六月）十四日晴、天王祭如例、夜中組頭常八来る。用向は此度御屋形より御出役洪沢成一郎殿同篤太夫殿之御用也、然る処拙僧并ニ吹上修道ニ逢度旨被申候由ニ而参る。○十五日晴、朝常八来り、同道御役人旅宿江参る、篤太夫号青渚、詩稿ヲ出して被示、随分之文学士也、手跡も見事之事、（略）此両士天朝家也、去年御上京之節御屋形江入、御供ニ而此度京都より御用ヲ蒙り下り廻村也、面話至而丁寧之人也、談話及数刻帰る、但し英士募方被相頼候事（注）赤心報国ニ誠意を込めて国のために尽すこと

この後、「廿二日洪沢二子宿出立」とあるが、飯能に向かっている。そしてまた高麗に戻っている。

（七月）晦日晴、洪沢氏到来之趣ニ付、大谷木より諸所周

旋致候、夜ニ入帰る、今日洪沢氏本所江着也

八月朔日晴、夕刻田島保次郎大谷木恭輔来る、洪沢氏江目見為致候処、帰宅之上親共江申聞御挨拶可致と申帰る（その後面会しているか不明）○二日晴、朝比留間邦造と洪沢篤太夫殿試合有之ニ付、拙僧も早朝参り候、洪沢氏与一面手合願候事、今日毛呂権田より京都江の伝書洪沢氏江相渡す、九ツ時小川相太来る、是ハ周蔵門人なり、比留間より吹挙、目見いたし候、随分英士なり、然所京師動揺之義故か先達而取極ニ相成候、人物異変之者出来候ニ付、当九ヶ村談合ニ而申立

小川耆人ニ而十人ニも勝り可申段内々申上候処、洪沢氏承知也、依之小川取極ニ相成、当六日比留間泊りニ而、七日江戸着し対談なり、（略）○三日晴、洪沢篤太夫殿出立也

三、パリ万国博出展募集の古文書

慶応三年（一八六七）四月から開催されるパリ万国博覧会への出展募集とでもいう古文書を読んだ。慶応二年五月十五日のこの古文書は形式的とは言え、当時の百姓町人までも募集対象にしていた。パリ万博は日本が初めて参加した国際博覧会で、総入場者数は九百万人強と文献にある。江戸幕府、薩摩藩、佐賀藩が幕府とは独立に出展していた。

当時、幕府はフランスとの関係を強めていて公使ロツシユを通じて参加することになり、各藩にも参加を促す通達を出し、また武士のみならず町人の参加も許していた。幕府からは將軍徳川慶喜の弟で御三卿・清水家当主の徳川昭武が將軍名代として派遣され、随員は総勢三十名ほど。その中には洪沢栄一や清水卯三郎・吉田六左衛門等の商人、旅芸人の浜碇定吉一座や、

それに柳橋の芸者も三人ほどいた。

幕府の出品物は、衣服・漆器・銅器・武器・船具・鋳物・書籍など多岐のものが持ち込まれた。武器には刀剣・元込め銃・鎧など、書籍には江戸名所図絵・東海道名所図絵・北斎漫画などが含まれ、伊能忠敬の実測日本地図や高度な和算書もあった。薩摩藩は「日本薩摩琉球国太守政府」の名で幕府とは別に展示し、独自の勲章（薩摩琉球国勲章）まで作成していた。幕府の薩摩藩への抗議は聞き入れられず、幕末の政争がパリ万博まで持ち込まれた。

なお、「幕末のパリ万博に『十四歳特使』⁴」という新聞記事には、「一八五〇年代、欧州の絹の産地に伝染病が広がり、フランス経済にとって重要なリヨン絹織物業は壊滅的な被害を受けた。この危機を知った家茂は日本の蚕種を皇帝ナポレオン三世に贈り、フランスの絹織物業を救う。ナポレオン三世は家茂へのお礼として万博に招待した」とある。歴史の一面を報じていて興味深いものがあるが、家茂はこの「出展募集」の通達から間もなくの慶応二年七月に病没している。⁵古文書の解説文は次のようなものです。

来卯三月仏蘭西国都府ニおひて

宇内各州出産之物品を取集展観場

相開候ニ付御国産之ものをも御差送り有之

候様いたし度旨同国政府方申立御国地

出産之物品同所江差送り度望之ものハ

其筋江可申立且百姓町人ニ而も同様差出

度ものハ御差許可相成候間是亦其筋江

可申立旨其御筋方御達有之条得其意
此廻状村名下江名主令受印早々順達
留り村方可相返候以上

江川太郎左衛門

寅

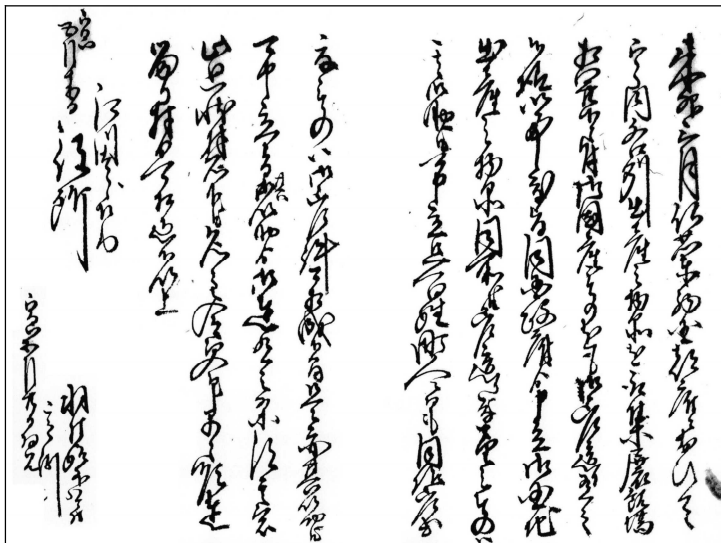
五月十五日

役所

羽村始外八ヶ村

定例

寅五月廿日拜見



参考文献

- (1) 「南遊季候」(デジタル版『渋沢栄一伝記資料』)
- (2) 『桜陰筆記 第一巻』(日高市高麗神社、平成13年)
- (3) 国立国会図書館 HP「1867年 第2回パリ万博」
- (4) 熊田マリのパリ通信3「(東京新聞、平成29年11月15日)」
- (5) 羽村市・島田家文書(慶応元年御用留)